

革命の白い流星

水冷山賊1250F

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

革命機の世界にロンドベルが迷い混んでしまったらの話です。

目次

第8話
暁の蜂起

めぐり逢い宇宙編

第1話 プロローグ | 1

第2話 絶望を知る少年の目覚め

12

第3話 子供の国 | 24

第4話 パイロットの強化 | 36

第5話 逆鱗に触れるドルシア

49

陸の十字架編

第6話 新生ジオール、武装化への

道 | 66

第7話 進撃のロンド・ベル | 76

めぐり逢い宇宙編

第1話 プロローグ

地球連邦宇宙軍独立外郭機動部隊ロンドベル旗艦

ラー・カイラム

ブライト・ノア

「ラー・カイラムでアクシズを押しすんだよ！」

「無茶言わないでくださいよ!？」

「地球が駄目に成るかどうかなんだ！」

「知りませんよ?」

「生き残りたい奴は、退艦しろ！」

別に責めてる訳じゃない。可能性があるなら、それが絶望的な数字でも!

「付き合いますよ艦長、最後まで。」

「すまない。退艦したい奴は退艦して良いと流してくれ!我が艦はこれより地球の引力につかまったアクシズの破片に取り付く!!ラー・カイラムの前方をアクシズに着け、最大加速する!!」

「了解！了解！」

ラー・カイラムはアクシズに向けて第1戦速で近づいていく。応援に来た機体や、ジオンの機体までアクシズに取り付きブーストをかけていた。

アムロ、お前はそこに居るんだな……。確信だった。あいつだけを逝かせる訳にはいかん。緑色の光がアクシズを包みこみ、MSが次々に弾き飛ばされていく。何処かのジェガンがラー・カイラムに取りついたが構わん。見えた!!レガンダムだ!

「レガンダムの横にラー・カイラムを着ける!!」

「了解！」

激しい振動と共にラー・カイラムの前方艦板が潰れていく。ある程度安定したか？

「艦の安定を確認！」

「最大加速だ！」

「了解！艦長！一緒に一緒にきて光栄でした。」

「ありがとう、私も君達と一緒に戦えたことは、この上ない誇りだ。」

アムロ、お前もな。思えばあの一年戦争からこつち、最後まで一緒に戦ったのはお前だけになったな。俺達も逝くときが来たんだな。だが最後まで抗って見せる!

「艦の姿勢を保持！ここからが正念場だぞ！全員気合いを入れる!!」

「了解！」

「ブツブツ・・・ト、ブライイト！何をやっている!？」

「レガンダムから通信です!」

「分かった!アムロ!今は問答をしている場合じゃない!俺達も命を懸ける!!」

「・・・もう戻れないぞ?」

「戻る時はお前も一緒だ。集中するぞ。」

「分かった!」

通信が切れた。ここからが正念場か。だがアムロと一緒にならなんでもやれる気がしてくる。

「総員よく聞け、決して不可能ではない!生きてかえるんだ!」

全員が叫びながら応えてくれた。俺は良い部下を持った。これならやれると思った時、レガンダムからの光が激しくなり、俺は徐々に意識を失った。アクシズが地球から離れて行くのを確認しながら・・・。

????????
レガンダムコックピット アムロ・レイ

ピッピッピッ五月蠅い音だな・・・。おと?急に目が覚めた。

「シャア!?ブライイト!どこだ!?!」

「アムロ大尉!生きてたんですね!」

「ああ、ラー・カイラムは無事か……。アクシズは!?」

「アムロか!?」

「ブライト!!なんて無茶をやるんだ、あんた!」

「お前にだけは言われたくないな、それは。それより此方に戻れるか? 機体の状態を
確認してくれ。」

「???何を言ってるんだか。まあ良い、機体のチェックだ。エネルギー100%、ビーム
ライフル及びハイパーバズーカ全弾装填済み。フィンファンネル全機装着……?」

「な……。なに!?!」

装甲の損傷箇所もない。どうなっている?

「こちらレガンダム。問題ない、今から帰投する。そちらの座標を教えてください。」

「お前の真後ろ、5 kmの位置だ。今そっちに向かっていている。」

「分かった。」

アムロは、機体をラー・カイラムに向け、合流すべく動かしたのだった。

ラー・カイラムブリッジ

アムロ・レイ

ラー・カイラムは、前方甲板の破損が見られない。俺は、ブリッジにレガンダムを着
け、真つ直ぐブリッジに入った。

「ブライト、一体どうなっているんだ？」

「俺にも分からん。サイコフレームの光を浴び、アクシズが地球から離れて行ったのは観測したが、その後意識を失ってな。どうやらブリッジ要員だけではなく、乗員全てだったようだ。」

一瞬言葉を失った。そんな事が起こり得るのだろうか？

「我々は何者かに呼ばれたのかもしれない。」

「今更、神かよ？この時代に？」

「今、各部署に調べさせたがMSドックに何が有ると思う？」

「生き残ったジェガンだろ？」

「新品同様のな。それが7機。リ・ガズイの新品が1機だ。」

「バカな！リ・ガズイは、」

「ああ、損壊したな。ついでにパイロットも全員無事だった。ケーラもな。」

「そ、それじゃ、俺達は死後の世界に居るのか？」

「死後の世界に宇宙戦艦と最新鋭機動兵器か？笑えない世界だ。正しく修羅道だな。」

「修羅？」

「ミライの実家がある国、ジャパンと言う国で古くから伝わっている話でな。死後も終わりの無い戦いに明け暮れる世界の事らしい。」

「?北歐神話のヴァルハラ的事じゃないのか?」

「いや、神々の戦いでは無く、悪鬼羅刹どもとの戦いらしい。詳しくは知らんから、余り突っ込むなよ?」

「分かった。所で現在地は、どの辺りだ?」

「月周回軌道付近だが、おかしいんだ。各サイドが見当たらない。10時の方向に人工の構造物が有るが、見たことがない。」

頭の中で助けを求める声が聞こえた。若い少年と少女達だった。

「艦長、10時の方向で戦闘が始まりました!5隻の艦隊が、構造物に攻撃をしかけています。」

「何?」

「ブライト、救援に向かおう。あそこに居るのは子供達だけだ。」

「そうだな。艦を10時の方向に向けろ。これより前方の戦闘に介入する!ラー・カイルム第1戦速。オペレーターは、全チャンネルで双方に停戦を呼び掛ける!アムロ、レガンダムをMSデッキに移動させて待機だ。」

ブリッジ要員が了解を告げ、直ぐに動き出す。

「ブライト、俺はレガンダムで先行する。間に合わないかもしれないからな。」

「分かった。無理はするなよ?」

「了解だ。」

ブライトは、艦長席の受話器を取りMSデッキに指示を出す。

「アムロが先行する。ゲタの準備をしてくれ。MS隊のパイロットはコックピットで待機だ。」

「悪いな。行ってくる。」

俺は、レガンダムに乗り込みMSデッキに移動する。すでにゲタの用意は出来ていた。レガンダムをゲタに乗せ動作の確認をする。異常なし、行ける。

「レガンダム、アムロ・レイ出る!!」

勢いよくカタパルトから射出され、戦闘が行われている宙域へと目指す。俺の心は、助けを求める声に急かされるような感覚を覚えていた。

ドルシア軍機動兵器イデアールコックピット

クーフニア特務大尉

人が戦ってるのに、横から何かしやしやり出て来た。全てのチャンネルで呼び掛けているらしい。

「こちらは地球連邦軍独立外郭機動部隊ロンドベル。双方戦闘を停止し、兵を引け！こちらに攻撃をした場合、撃墜させる。」

「なに言ってるんだか。」

地球連邦？聞いたこともない。バカじゃないのか？戦場でそんな事をしてると死んじやうよ？僕に殺られてさ！ミサイルを隙だらけの背中に撃ち込んじやう。

大量のミサイルを白い人型に向けて発射した。やっぱり僕だけじゃ無いみたいだ。バツフェ達も次々に攻撃している。

ははっあいつ死んだな。っと思つたらミサイルが次々に迎撃される。ついとばかりに、バツフェ達も墜とされていった。何だこいつ？右のマニピレーターを奴に向けた所で激しい震動と共に僕は永遠に意識を失った。

ドルシア軍モジュール77攻撃艦隊旗艦ブリッジ

カイン・ドレッセル

「攻撃止め！全軍撤退！」

あの白い機動兵器が現れて、ものの数分でこちらは壊滅的な打撃を受けた。

バツフェ35機及びクーフィアの乗るイデアール。奴は何者だ？しかも奴の来た方向から、戦艦1隻と、多数の機動兵器が此方に迫っている。

「大佐、あの軍隊はいつたい？」

「そんなことは知らん。取り合えず態勢を立て直す。やつらの事は、情報部に報告し調べさせる。」

あの白い機動兵器は、攻撃してきた全ての兵士に向けて、今も攻撃を加えている。何

か分からんが、放熱板の様なものも飛び回り、ビーム攻撃で確実に殺しに来ている。あの白い奴が操っているのか？あんな戦闘中に？

「早く退かせろ！何をやっている！全艦回頭、全速で退くぞ。命令を聞かない愚か者はドルシアには要らん！」

艦隊を回頭させているとやっと機動部隊が撤退して来る。遅い！お蔭で更に被害が増えた。敵わない相手だとなんで解らんのか！此方が退いていると、奴は追撃はしてこなかった。奴はジオールの機動兵器等では決してない。あのような兵器を開発出来ていれば、ヴァルヴレイヴ等建造する必要は無いはずだ。正に白い悪魔だ。一刻も早く、奴の存在を本国に伝えなければ。

モジュール77周辺宙域　ヴァルヴレイヴ01

時縞ハルト

な、何者なんだろう？ARUSの機動兵器じゃない。突然現れて、停戦を呼び掛けて来た。あんな兵器見たことがないから、少し戸惑っているとドルシア軍がああ機動兵器に攻撃を仕掛けた。殺られると思ったら信じられない事が起こった。

大量のミサイルを頭部にあるバルカンとライフルで迎撃しながら、敵機を次々に墜とていった。正直恐い。何あれ？巻き込まれないようにモジュール77の方に離れる。

「ハルト！何あれ!？」

シヨーコが通信を入れてくる。

「知らないよ。でもあの人は戦えないよ。確実に負ける。あれには勝てないよ。」

あ、また墜ちた。ドルシア軍も逃げれば良いのに。なんてバランスブレーカーだ。あ、戦艦が逃げていく。

・・・僕たちどうなるんだろう？

「君、聞こえるか？その人型機動兵器のパイロット。」

「はい、聞こえます。」

「我々は地球連邦軍独立外郭機動部隊ロンドベル。自分は、そこでMS（モビルスーツ）隊の隊長を勤めているアムロ・レイだ。君は何者だ？教えてくれないか？」

「はい、ダイソンスフィア、モジュール77中立国家ジオールの咲森学園二年生の時綺ハルトです。」

「学生なのか？なぜモビルスーツに乗っている？」

「モビルスーツってもしかして、この機動兵器の事ですか？初めて聞きました。」

「何を言っているんだ？」

「アムロさんと言いましたよね？僕達は地球連邦軍という組織の存在すらも知りませんでした。でも、戦いを止めたって事は、戦争を止める為の平和維持組織ですか？良かったら、僕達助かったんだ。」

「い、いや、似たような物かな？」

「そうなんですか、勉強不足ですいません。ニュースを余り見ないもので。いつ頃発足されたんですか？最近ですか？」

「ああ、宇宙世紀0090、3月21日に発足しているよ？」

「え？宇宙世紀？何ですかそれ？今は真暦ですよね？」

白いモバイルスーツ？のパイロットの人は絶句してしまった。

第2話 絶望を知る少年の目覚め

シヨーコ達と共に指令室にいたエルエルフは、突然介入してきた機動兵器に目を奪われた。

いや、エルエルフだけでは無い。そこに居た全ての人の目が、あの白い機動兵器に釘付けになっていた。

バツフェエだけではなく、イデアールまで操縦席への一撃で落としていく。

圧倒的な力。ただこの一言に尽きた。特攻を仕掛け接近した機体は、光り輝く剣によつて引き裂かれ次々にスクラップに変わっていく。

彼等は知らない。平行世界で50年以上になる戦乱の歴史の中で、最強と謳われたパイロットと、人の想いを力に変える愛機の力を。

敵からは白い悪魔と恐れられ、味方からは白き流星と称賛された最強の兵士。それがアムロ・レイという男だったのだ。

「見ろ！ドルシア軍が引いていくぞ！でも地球連邦軍ってなんだ？そんな組織聞いたことが無いんだが？」

「あら、貴方もですか？でもあれだけの機動兵器を開発してるんですもの。きつとド

ルシア軍の非道に憤った各国が同盟を結んだんじゃありませんの？」

生徒達の話の横で聞きながら、エルエルフはその可能性を否定した。

ワンオフ機として、あれだけの性能を持つ機動兵器を簡単に同盟に出せる筈が無い。やろうと思えばあのパイロット、艦隊を潰すことも出来た筈だ。そんな戦力は普通、秘匿して懐に仕舞って置く筈なのだ。それに奴等どこから現れた？あんな何も無い空域を経由する意味が分からない。

暫く考え込んでいたら、白い機動兵器から通信が入った。

「聞こえるか。こちらロンド・ベルのアムロ・レイだ。武装解除に応えて頂き感謝する。そちらの代表者と話したい。代表者は何方か？」

「はい、新人ですが一応この教員をします、七海リオンと申します。貴方はARUSの関係機関ですか？」

「いや、違う。その辺は後程話させていただくとして、こちらの母艦を一度そちらに寄せさせたい。補給も受けられれば有り難いのだが。」

「分かりました。今後のことも含めて、お話ししたい事が有ります。此方は受け入れ可能です。でも、宇宙船ドックが酷い事になってるかも知れません。そちらの方で作業をお願いしても良いですか？」

「了解だ。そちらの機動兵器も手伝ってくれるんだろ？」

「え、ええ、まあ。でも期待しないでくださいよ？パイロットは全員学生ですから。」
「学生？大人は居ないのか？あれだけの機動兵器を運用しているんだ。それとも、そちらは軍学校か何かか？」

「そういう訳では無いのですが。そちらも、後程説明させていただきます。」
「了解した。」

凛々しい男性からの通信が終わった。やれ声に色気が有るやら、優しさが滲み出てるやら周りの女共が騒いでいる中で、エルエルフだけは戦慄していた。

（あんなまともそうな男だが、なんの躊躇いもなく引き金を引いていた。しかも、背後の敵まで正確にコックピットを撃ち抜く技量、超一流の戦闘者だ。それでいて、奴からは狂気を感じなかった。一体どれだけの戦場を戦い抜いたのか。しかもあの機動兵器の性能、ヴァルヴレイヴどころの話では無い。これからどうなるんだ？いや、彼等の力を借りられれば！）

モジュール77周辺宙域 ヲガンダムコックピット

アムロ・レイ

さて、ブライト達に連絡するか。しかしいったいどう云う状況だ？俺達の1年戦争の

時よりも酷い事に成っているのだろうか。

取り敢えずは、ここまでで分かつていることを報告するしかないか。

「ラー・カイラム聞こえるか？此方レガンダム、アムロ・レイだ。」

「此方ラー・カイラム。感度良好、レガンダムどうぞ。」

「あの建造物の入港許可が出た。建造物の名称は、モジュール77。どうやら、ハイスクルルの生徒と教員だけで運用されているらしい。」

「何!?どう言う事だ。軍人は一人も居ないのか!？」

「どうやらそうらしい。取り敢えず、宇宙港が使用できるようだが、ガイドビーコンなんて無さそうだ。フルマニュアルで接舷する必要がある。MSを出して、牽引する必要があるかもしれない。対応の方はそちらで頼む。後、あちらの状況の詳細は、後程説明があるそうだ。」

「了解だ。MS1小隊をそちらに先行させる。アムロは彼等を指揮してくれ。で、敵はやはりジオンか？」

「ブライト、心して聞いてくれ。ここは俺達が知っている地球圏じゃない。」

「どう云う事だ？」

「この世界では、宇宙世紀は使われておらず、真歴というそうだ。」

「は?？」

「ついでに、地球連邦軍やジオン軍も存在していない。地球はまだ統一されておらず、国家がまだ存在しているようだ。」

「ほ、本当か!？」

「ああ。一部国家の名前は違うが、ここは地球では有るようだ。大陸の位置など、俺の知っている知識と一致する。」

「つ、つまり……」

「ここはおそらく、パラレルワールドの地球みたいだ。信じたくは無いがな。」

「では、チエーミンとミライは……」

「この地球には居ないだろうな。ここは俺達の知る地球じゃない。」

「……バカな……いや、そうか。そう考えなければ、この状況の説明が付かんか。」

「まあ、戻れないと決まった訳じゃない。取り敢えずは、こちらに来てから考えよう。」

「やけに楽天的だなアムロ。」

「まあ俺はあの時死んだと思っていたからな。生きているだけで儲けたような物だ。生きていれば何とかなるような気がする。」

「ニュータイプの勘か?」

「いや、ただの勘だ。」

「お前の勘は怖いくらい当たるからな。まあ良い。こちらこそちらに合流する。」
「了解だ。」

楽天的か。何か縛られていたものから開放されたような感覚はある。これが何を意味するのか？この時の俺には分からなかった。

ラー・カイラム自習室

ハサウエイ・ノア

僕は一体どうしたんだ？確か銃殺された筈じゃ……。それがなんでノーマルスーツを着込んで、連邦軍の戦艦に……。

「気が付いた？ハサウエイ。」

「チエ、チエーンさん？な、何故……？」

僕が殺してしまった女性。僕の罪。ここは地獄なのだろうか？

「落ち着いて、ハサウエイ。どういう訳かは分からないけど、私は生きているわ。」

「あれから何年経ったと思ってるんです？そんな事信じる訳ないでしょう?！」

「え??何を言ってるのハサウエイ？そんなに時間は経ってないみたいだけど？ケーラも不思議がってたし、アストナージさんは軽くパニックに成ってたけど、皆あの時と然

程時間は経ってないわ。」

「あの時? ケーラ? アストナージさん?」

「シヤアのアクシズ落とし阻止作戦よ。私はどうなったかは知らなかったけど、阻止は出来たみたいよ?」

そこ!?!と云う事は、ここは宇宙?!?ラー・カイラム??

「と、父さんは!?!」

「落ち着いて、無事よ。話を聞いたところ、凄い無茶をしたそうだけど。」

「無茶?!?」

「ええ。ラー・カイラムでアクシズを押し出したそうよ。ガンダムと一緒に。」

「ええええええ?!?!」

ど、どうなっているんだ? そんな事実は無かった筈だ。歴史が変わったのか?

でも僕は覚えている。人を殺すために引いた引き金の妙な軽さも、アイツと戦った記憶も、Eガンダムを操る感覚も。あれは夢や幻なんかでは決して無かった。

「チエーンさん、手鏡有ります?」

「これで良い?」

チエーンさんから受け取った手鏡の中では、驚いた顔をしている13歳の僕がいた……。

父さんは!? 父さんなら、あの時のことも覚えているかもしれない。Ξガンダムの事も。僕は手鏡を返して自習室から飛び出した。

ブリッジまでの距離がもどかしい。ブリッジに入ったと同時に、父を呼ぶ。

「父さん!!」

「ん? ハサウエイ、起きたのか。どうしたんだ慌てて。少しは無断乗艦を反省したか?」

「と、父さん?」

僕がジェガンで無断出撃したのも気付いて無いのか? そして、僕が多くの罪を重ねた事も・・・、マフティーとして命を賭けて戦った事も・・・?

「は、話が有るんだ。少し良いかな?」

真剣に話しかける。

「分かった。接舷までには戻る。副長頼めるか?」

「了解です。接舷後に戻られて大丈夫です。ゆっくり話し合ってください。」

「すまん、助かる。甘えさせてもらおう。ハサウエイ、俺の部屋に来なさい。そこで聞く。」

「ありがとう、父さん。」

父さんには全てを話そう。僕の今までの事。僕の戦いの事も。

マフテイーの名を背負うと決めたあの日より重い覚悟を決め、父の背中を追いかけて歩いた。

ラー・カイラム 艦長室

ブライト・ノア

歴史が変わった？息子の話を聞いて、初めはなんの事か分からなかった。しかし、本来なら私はラー・カイラムでアクシズを押し事なく、ただアムロが起こす奇跡を眺めるだけで、アムロの命を犠牲に地球は救われる筈だったそうさ。

その後も私はロンド・ベルを指揮し、息子ハサウエイは地球連邦政府に反旗を翻し銃殺された……。

息子が嘘を言っているようには見えない。実際、連邦政府はそのような動きになる可能性は大きい。アデナウアー・パラヤ然り、軍の上層部然り。

やはり連邦政府と軍は腐って行く運命なのか。そしてその組織の中で、私は足掻き続けなくても結局は何も変わらなかった。

ニュータイプと呼ばれる人達と共に戦ってきたが、彼等を守ることも救うことも出来ず、歴史の波に吞まれていくというのか。私の息子さえも……。

「父さん、……は僕達が居た地球じゃ無いんだろ？」

「何故わかる、ハサウエイ?」

「此の宙域には、あの世界ほど死んでいった人達の念が感じられない。アクシズを押しのために焼かれて逝った人達の断末魔も、無念さも感じないんだ。ただ、虐殺する積りが、反対に殺されて理不尽に感じている甘ったれた怨念だけ。あの世界ほど切羽詰まった感じは無い。」

「お、お前もニュータイプなのか? そうか、確かお前が乗っていたガンダムも、サイコミュ搭載型だったな。母さんの血か・・・。」

「いや、僕はニュータイプじゃ無いよ。過去に囚われて、テロに走るしか無かった愚か者だ。ニュータイプだったら、もっと上手くやれた筈だ。」

「お前はニュータイプをヒーローか何かと勘違いしている。彼等は普通に人だよ。シヤアなんかその典型だ。過去に囚われ、地球に隕石を落とそうとした。アムロと違って分かり合えた筈なんだがな。結局は反発しあつてあんな事に・・・。ニュータイプと言えども、やはり我々と同じ人間なんだ。」

「そうかも知れない。僕も過去に囚われていたのかもね。今なら分かるような気がする。人間は突然そんなに進化する訳は無いってね。」

「そうだ。お前はきつと急ぎ過ぎたんだろうな。けど心ある人達はきつといる。連邦政府や軍がそう言う流れになるなら、連邦政府は求心力を失い、その内瓦解するのだから」

う。これはお前にとつてやり直すチャンスになるかも知れない。」

「うん。僕もそう思うよ。」

「まあ父さんは少し焦るべきだったのかも知れないが、年長者からのアドバイスだ。お前は焦らずに頑張れ。私達がこの世界に呼ばれた意味が必ず有る筈だ。」

息子は戦士として成長したのか……。悲しくもあるが、この世界に連れて来られた以上、戦う力は必要だ。何と戦うかは分からないが。

ラー・カイラムMSデッキ

アストナージ・メドツソ

流れ弾（ミサイル？）の爆発に巻き込まれて死んだと思つてたら、五体満足で生きていた。死んだはずのケーラも生き返ってるし、どうなつてんだ??

暫くパニックになつていたが、生き残れたのならそれで良いかとも思つたら落ち着いた。今はただ、生きている事を喜ぼう。

「アストナージさくん、MSデッキの奥にこんなコンテナ有りましたっけ?」

「なんだ? ちよつと見せてみる。なんだこの重MSは? こんなの有ったか? 何々? 型式番号RX-105? ガンダムだとっ!!」

いったいどうなってるんだ？直ぐに艦長に知らせなくては。

アストナージはMSデッキの連絡用回線に急ぎ、ブライトを呼び出すことになる。

混迷を極めるこの情勢に、高過ぎる武力を持つ集団がどのような結果を産むのか？

その答えは、まだ誰も知らなかった。

ガンダム、それは人に哀しみと希望を見せるシステム。君は生き残ることが出来るか

？

第3話 子供の国

時縞ハルトは、アムロと名乗った人物を信じるべきか疑うべきか迷っていた。

先日もARUSの軍隊と議員がやって来て、自分達から武器、ヴァルヴレイヴを取り上げ、皆を見捨てようとされたのだ。

しかし先程の戦いでは、彼は自ら武器を持ち、自分達をドルシアの手から守ってくれた。あれだけ高性能な兵器を手足のように扱っているのだ。今更ヴァルヴレイヴに興味を持つとは思えない。

しかも、どうやら彼等はこの世界の人達では無いようだ。それが何を意味するのか分からない。侵略するつもりなのか、庇護を得たいだけなのか。

もし庇護を受けたいのであれば、ARUSやドルシア軍に付くのか？間違いなく言えることは、彼等を手に入れた勢力は、一気にその勢力を拡大するだろう。

社会に詳しくない自分でも分かる。全世界を巻き込んだ戦争が起こるだろうし、僕達は生き残ることが出来るのか？

「確か、時縞君と言ったね。そんなに警戒しないで良い、俺達は君達を悪いようにはしないよ。」

「そ、そんな。警戒なんて……。」

「ハハハ、隠さなくても良いさ。何度も言うが、警戒しなくても良い。取り敢えず此方は現在の状況が分かかっていない。君が知る限りで良いから教えてくれないか？」

「は、はあ。分かりました。先ずは……。」

そこからハルトは語り出した。この構造物が、元々ダイソンスフィアと言う巨大なスペースコロニーのような物の一部であった事。

そのスペースコロニーは、ダイソンスフィアと呼ばれ、各国が作ったモジュールに人々が住んでおり、人口の約7割はダイソンスフィアに住んでいた事。

彼等はジオールと言う国が作った77番目のモジュールに有る学園の生徒であったが、突然ドルシア軍がジオールに侵攻。その時に逃げている最中、偶々ヴァルヴレイヴを見つけ乗り込んだ事。

モジュール77以外のジオール領地は既にドルシア軍に無条件降伏をしている事。

先日、二大国家の一つ、ARUSが軍と議員を派遣して彼等を護ると言ってきたが、その実は彼等の兵器、ヴァルヴレイヴを入手する事が目的であり、彼等を護るつもりは無く、見捨てられ、ヴァルヴレイヴさえも奪われそうになった事。

幾度かのドルシア軍の襲撃で友人を殺されながらも、学園は独立を宣言し中立地帯である目指している事。

「なるほど、大変だったね。所でドルシア軍は、何を理由にジオールに侵攻したんだい？」

「ええつと、中立国であるにも拘らず、秘密裏に強力な兵器を開発していたとかなんとか言っていましたね。それが何か？」

「そんな事で軍事侵攻を?!聞いたところ、ドルシアは侵略国家だろう? 独立国が身を守る為に軍備を備えるのは当然じゃないか。それを理由に侵攻するのはナンセンスだ。各国はドルシアに対して何もしないのか?」

「ARUSが非難声明を出しただけで、ドルシアに対して軍事行動は行われて無い筈です。」

「馬鹿な。明日は我が身だと思わないのか? そんな危険思想の国家があれば、同盟を組んで対処して然るべきだ。放って置けば大変な事になるぞ。」

「自分に火の粉が降りかからなければ、皆そんなものじゃないですかね?」

「それは政治家の存在する意味がない。どこの世界も同じか……。そして、本来は戦わなくても良い子供達が戦場でそのツケを払わされることになる。」

アムロのその言葉に、ハルトはもしかしたらと思った。近くに同年代で一流の戦闘員、エルエルフが居たのも彼の考えを肯定していた。

「アムロさん、もしかしてアナタも？」

「ああ、初めて戦ったのは15の時だ。それが今ではMS部隊の隊長さ。君がどんな覚悟でその兵器に乗り込んだのかは聞かせて貰った。だが無茶はするな。死に急いで駄目だ。石に齧り付いても生き残れ。そうじゃなきや誰も守れない。」

「ハイ！」

「これからどうなるかは分からないが、おそらくブライト、ああ、今から来る艦の艦長だが、彼の事だ。君達を見捨てるような真似はしない筈だ。訓練位は付き合うことに成るかもな。」

「随分信頼されてるんですね。」

「ああ、初めて戦争に参加した頃からの付き合いだ。大丈夫、信用出来る人物だよ。」

「ハイ、その時は宜しくお願いします。」

「了解した。ま、全てはこれからの話し合いからだな。」

ハルトはこの時やっと、アムロから悪意が無い事に気付いた。やっとな大人と会えた喜びに歓喜していたのだった。

ラー・カイラムMSデッキ

ハサウェイ・ノア

ここに何故これが……。父に連れられMSドックに来てみれば、奥の方にある筈のないMSが有った。

「RX-105って書いてますけど、こんなの受け取った記憶も無いんですよ。一緒にマニユアルは有るんですけど、どうやらサイコミュを載せてるみたいですが、いったい何なんですかね、これ。」

僕の表情を見て何か気付いたのだろう。父が僕に問いかけた。

「ハサウエイ、これが何か分かるのか?」

父さんに耳打ちする。

「RX-105、メガンダム。大気圏内でもマツハ2で飛行できる、空中戦が可能な最強のMSだよ。」

「こんなのが飛行できるのか?」

「MS搭載レベルに落とされたミノフスキーエンジンのおかげで、ミノフスキークラフトが可能なんです。」

僕達を怪訝な表情で見ていたアストナージさんが、父さんに話しかけた。

「どうしたんですかブライト艦長? コソコソ話しなんかして。もしかして、ハサウエイ君に心当たりでも?」

「いや、空を飛べそうな機体だなとな。素人の感想だ。」

「いい線行つてますよ。カタログスペック上は正に空を飛べます。少し信じられませんがね。」

「そうか。アストナージが中心となつて、この機体を調べてみてくれ。いつ使うことになるか分からんからな。戦力は多いほど良い。」

「了解です。」

父さんが眉間のシワを揉んでいる。本当に困つた時にする癖だ。困っている所悪いが、僕は何故かこの機体は僕が使わなければならぬと感じた。

おそらく僕達を此処に連れてきた存在はそれを望んでいる。そして、それは悪い事ばかりではない。そう感じたんだ。

父さん、悪いけどその時が来たら僕は三に乗るよ。少年の体に戻つたけど、僕の手は僕の意味で血に汚れる事を選択したんだ。三ガンダムを見上げ、そう思った。

咲森学園 首相官邸（校長室）

ブライト・ノア

あれから数時間後、私は咲森学園と呼ばれるハイスクールに来ていた。どうやらこのモジュールという構造物には学生しかおらず、大人は教員2名。しかも内1名は教育実習生。私からしてみれば、彼女も子供だ。

極めつけは彼女達は新生ジオールを名乗り、総理大臣まで決めていたらしい。それが目の前の彼女、指南シヨーコ嬢だ。隣に座っているアム口は絶句しているのか言葉も発せないようだ。

「で、現在に至る訳です。」

「なるほど。で、現在の戦力はヴァルヴレイヴと呼ばれる機動兵器が5機にパイロットが4人。これだけの戦力で月を目指していると。無謀を通り越して呆れるな。」

「で、でも、元ドルシア軍のエースのエルエルフ君も協力してくれてます。」

「話にならない。彼の事はドルシア軍でも把握してるだろう。今に対策を取られて、手玉に取られるのがオチだ。」

「では、私達はどうすれば……このまま大人しくドルシア軍に投降しろと?」

その時今まで沈黙していたアム口が口を開いた。

「ブライトの言っていることは、何もそう言うことを言ってるんじゃないんだ。この口喧しいおじさんは、君達を心配しているんだ。君達はハイスクールの生徒なんだろう? その内の4人は既にパイロットとして人を殺している。戦争なんだから仕方ないのかもしれないが、それはとても危険なことなんだ。おそらく彼らは、そう簡単に日常には戻れないだろう。その上で聞こう。やはり君等は最後まで月を目指すのか? どんな犠牲を払おうとも。」

「犠牲？」

「そうだ。戦う以上は敵に敗れて死ぬことは当たり前のことだ。幾ら高性能な兵器でもな。彼らパイロットを犠牲にしても自由を求めるのか？その辺りを真剣に考えたのかな君達は？」

アムロの問いに、少女は直ぐに答える。

「私は、私達は、それでも月に行きたい！皆一緒に力を合わせればきつとー！」

アムロめ！俺をおじさん呼ばわりして！しかし俺が言いたいことはそういう事だ。少女の返答を聞き、ただ子供だなど思った。頑張れば何でも出来ると思っている。危うい。危ういんだが、彼等だけでは無理なんだがな。どうしたものか。

「そこをお願いします。あなた方の力を貸してください！このモジュールにある施設を自由に使ってもらっても構いませんので。」

「……」

いったいこのモジュールにどれ程の施設があるのか。

「軍人さん達に、一回見てもらった方が早いよ。」

燃れた白衣を着ただらしなげな男性が話しかけてきた。

「あなたは？」

「この物理教師をしています、貴生川タクミと申します。御二方をヴァルヴレイヴの

専用ドックにご案内しますよ。色々と設備も揃ってますし、修理や補給も可能だと思います。」

「そうですか。では確認させて頂きます。一人同行者を付けても宜しいでしょうか？」

「ええ、もちろん。」

「ありがとうございます。艦のメカニック主任を同行させます。アムロ、アストナージを呼び出してください。」

「了解した。取り敢えず、あなた方が戦い抜くつもりである事は分かりました。こちらの返答は、その施設を見てから考えさせてもらいます。」

自身を現実主義者と疑わないブライトは、冷静に判断して今から向かう施設に対して、そこまでの期待はしていなかった。

それよりも、この貴生川と名乗った男に、違和感を覚えていた。

それはアムロも同様であり、アムロに至っては、彼が何か隠していると直感で感じた。そしてそれは正しかったと直ぐに判明することになる。

モジュール77地下施設入口

アムロ・レイ

「アストナージ、呼び出してすまないな。ちよつと見てもらいたいものが有るんだ。」

「はじめまして、貴生川タクミと言います。この学校の物理教師です。」

「ああ、わざわざどうも。アストナージ・メドツソです。あの艦のMS、まあ、機動兵器ですね。その整備主任です。」

「では参りましょう。こちらです。」

貴生川に先導され、モジュールの地下施設へと向かう。そこは、とても民間施設の地下とは思えなかった。

外縁部には自衛の為の機銃座、そして、ヴァルヴレイヴと呼ばれる機動兵器の格納施設。そこには修理や、組み立て、製造に至るまでの必要な設備が揃っていた。

「ここは、立派なMS、いや、機動兵器の製造工場ですよ。民間施設の地下になぜこんな物が！」

アナハイムで働いていた事も有るアストナージが驚いている。

「貴生川さん。学園の方では、この施設の存在を把握して居たのですか？」

「ええ。把握してましたよ。と、言うよりも、あの学園はヴァルヴレイヴのパイロットとしての適応者を集めた施設だったのです。」

「適応者？ハルト君は自分の事を、普通の高校生だったと言っていましたか？」

「でしようね。ここに居た大人以外、ここの本当の存在意義を知らない筈です。」

「では、七海先生も？」

「いや、彼女は教育実習生です。仮にも普通の高等学校のフリをしているのですから、教育実習生の受け入れをせざるを得なかったのでしょう。私はここに来て直ぐに、上司と揉めましてね。適応者の監視目的で地上の学園に配属されたと言うことです。」

「それじゃあの子達は、大人の企みのせいで巻き込まれたというのか？いや、もしか！
「ああ、何か勘違いしてるかも知れませんが、ここで人体実験はしてない筈ですよ。私は殆ど此処には来てませんが、学園から生徒が居なくなつた事も有りませんしね。授業をサボつて逃げた生徒以外はですけど。」

なるほど。つまりあの学園の生徒は国から集められた生徒だと言うことか。強化人間等の非人道的な実験は行われていなささうであることには、一応安堵する。

「しかし、何を基準に適応者を選んでるんだ？」

「それは、私も知らされて居ません。ここの職員は、最初のドルシア軍の攻撃で、みんな死にましたから。私は運が良かっただけですよ。」

戦力を把握するために最後にアストナージに聞いてみた。

「どうだ、アストナージ。ここの施設はどれだけ使えそうだ？」

「詳しく調べてみなければ分かりませんが、うちのMS隊の整備は簡単にできますよ。新しくMSを製造することもね。」

「つまり、こここの施設の事は、ドルシアにバレていたという事か。」

「大体的ことは把握しました。では学園に戻りましょう。」

ブライトも、ようやく覚悟を決めたな。そうだな。子供達が無駄に殺されるのを見たくは無い。

厳しい戦いに成るだろうが、やり遂げる価値はある。

この日、新生ジオールと、ラー・カイラムは軍事同盟を結ぶ事に成った。

モジュール77と月面の距離は徐々に縮まっており、事ここに至り、ドルシア軍は最後の戦いを始めようとしていた。

第4話 パイロットの強化

「ヴァルヴレイヴ機だけで勝てるほど、戦場は甘くない。少しは連携を考えるんだ！」

激しい檄が飛ぶ中、僕達はシミュレーション訓練に勤しんでいる。訓練用のシミュレーターで、ラー・カイラムのエースパイロット一人にコテンパンにやられたのが昨日の事で、今日も今日とて、コテンパンにやられている。

つまりは、昨日からこの訓練が始まったって事だ。

「サンダーツ！出過ぎだ！しかも殺気が隠せてない！」

山田君のコックピットをビームが貫く。

「バカッ！そこで落とされたら!!」

カバーが手薄になった流木野さんが次に墜とされる。僕は何とか接近を試みるも、動きが速く、次の軌道も読めない。昨日から思ってたんだけど、あの緑色の機体、あの人の専用機じゃないよね？

「ハルト、落ち着け。相手のパターンを観察するんだ！」

「キューマ先輩！後ろ!!」

キューマ先輩の後ろに漂っていたバズーカが発射され、背後に直撃。

「なっ?!?」

「甘い!後にも目をつけるんだ!」

キューマ先輩の頭上に移動した緑色の機体から数条のビームが降り注ぎ、キューマ先輩のヴァルヴレイヴが爆散した。

「このおっ!」

「機体の性能に頼りすぎるんじゃない!直線的な動きになってるぞ!」

ビームが数発直撃したっ!?動きが止まった所でビームサーベルで切り裂かれた。

「シミュレーション終了。ハッチ開放します。」

機械音声のメッセージが流れ、画面から光が消え、屋内の優しい電灯の光が差し込む。

「あゝっ!だめかーっ!」

「ちよつと山田!あそこでなんで無理に飛び込むのよ!」

「サンダーだ!」

「後にも目を付けろって・・・、どうしろって言うんだよ。」

「よし、全員集合。ミーティングルームに来てくれ。」

「了解。」「おうっ。」

ミーティングルームに4人で向かっていると、

「駆け足っっ！」

怒られた。4人とも急いで急いでミーティングルームに向かった。僕達がミーティングルームに着くと、呆れた顔のエルエルフがいた。どうせ、素人ですよ。何を言われるのか構えていると、直ぐにミーティングは始まった。

「先ずは、君達の連携だが、途中までは中々良かった。昨日とは段違いだ。だがサンダー君、あれは無い。君の負けん気が強く、思いつきの良い所は買うが、あそこはまあ、辛抱する所だ。あれじゃあ、簡単に釣り出されて、袋叩きにあってしまう。ただの我慢ができない子供と同じだぞ。君の機体の6本の腕による格闘戦はハマれば強力だが、それを活かすには、相手を自分達の近くに引き寄せなきゃ。その為にも、」

「なるほど、ドツシリ構えてなきゃって事だな。」

「正解だ。君は戦いの流れを読むのも上手い。それで皆を助けてやらなきゃ勿体ないだろ？」

「お、オウ。そうか？ そうだな！ 分かったぜ、アムロさん！」

上手いなく、乗せるのが。

「犬塚君。君は相手との距離をもっと考えて。それと、前ばかりに気を取られては駄

目だ。君は中距離が得意な機体なんだから、全体を気にしないと。流木野さんは、もう少し前に出るべきだな。その機体の長所を活かせない。明日は、各自今日の内にフォーメーションを煮詰め直して、試してみよう。今日はこれで終わりだ。」

「「ありがとうございます。」」「「あざっした。」

アムロさんが退室していく。あの人に一当てするなんて無理だろう？

「ちくしょう、明日こそ絶対撃墜判定取ってやる！」

「山田、意気込みは良いが、それは無理だぜ。あの人に当たる気がしない。」

「サンダーだ！そんなんで、仇が取れると思うのかよ！俺は強くなる！ドルシアの野郎共をぶっ殺すまで、死ぬ訳にはいかねえ！」

「エルエルフ、君はどう思う？」

「あの人には、俺でも勝てる気がしないな。だが、戦いようは有る。しかし、あのシミュレーターの機体を動かせる奴がいらない。ぜひともシミュレーションはしたいのが。俺でも動かせはするだろうが、あそこまでの操縦は無理だ。」

「お困りのようですね？」

「ん？君は誰だ？」

「僕の名はハサウエイ。ハサウエイ・ノアです。あの艦の、艦長の息子です。」

「ふむ、艦長の息子の権限で、誰かを此処に派遣してくれるのかな？」

「そんな権限有りませんよ。僕が相手をするんです。」

「君が??」

「おいおい、お前、中坊だろうがよ! すつこんでろ。お前相手にするぐらいなら、エルフの方がまだマシだぜ!」

「あなた、歳は幾つなの?」

「生き残るのに年齢が必要なんですか? 今のあなた方なら僕一人でも十分です。アムロさんにあれだけ手を抜かれても一撃も与えられてないね。」

「何を!」

「論より証拠です。ここで話していても埒が明きません。」

「良いだろう、やってやるよ!」

「では、僕もジエガンを使いますね。この状態の僕に、一撃でも入れられたら僕は謝って、父さんに頼み込んででも練習相手を都合しますよ。」

「言ったな。では見せてもらおう。」

エルエルフが話しに乗った。仕方ない、一度は相手をしてやるか。フォーメーションの見直しも必要なのにな。

「ハルト、気合を入れていけ。もしかしたら、本当に強いかもしれんぞ。」

犬塚先輩、心配症だな。そんな風には見えないんだけど。

「お前、そんな風には見えないとか思ってるんだろ？お前が一番そんな風には見えないんだからな？人を見かけで判断するな。行くぞ。」

エルエルフをミーティングルームに残して、ぼく達はシミュレーションルームに向かった。ミーティングルームでも、シミュレーション状況が見れるし、各シミュレーターの状態が把握できるからな。まあ、不正は出来ないだろう。

軽く流すツモリのシミュレーションで、僕達はアムロさんよりもコテンパンにやられた。まさに何もさせて貰えなかったと言う方が正しい。

「僕の腕前は理解して貰えましたか？」

「ハイ。」「・・・オウ。」

「では、フォーメーションをあと15分で考えて下さい。その後、もう一度シミュレーションします。15分後に各自シミュレーターに搭乗してください。」

「分かった。全員聞いてくれ。・・・」

エルエルフの感想や、僕達の考えを元に、フォーメーションを作り変えて行く。次のシミュレーションからは、さっきまでのアムロさんと同じぐらいの実力に落としてやってくれた。何者なんだ、ハサウエイ君は。宇宙世紀の人達は、皆あれだけやれるのか？そうは思えないんだけど。でも、この二人の共通点を見付けた。攻撃を先読みするのが上手いんだ。そして、中々フェイントに引っかけられない。フェイントは殺意を込めて、

本命は殺意を殺し、ただボタンを押すような気持ちでつて、アドバイスまでされた。自主練の効率が上がったのは良い事だけど、本当に何者なんだ？

エルエルフサイド

「ちよつと待つてくれ、ハサウエイ・ノア。」

「ん、？なんですか？エルエルフさん。」

「聞きたい事がある。モジュール77の設備を使えば、そちらのジエガンと呼ばれる量産機を生産できると聞いた。そちらとしては、生産する積もりは有るのか？」

「さあ、聞いてませんね。父とはそういう話をあまりしないもので。でも父は、軍人ではない学生達を積極的に戦力に加えることは無いと思います。」

「それは戦力として信用ならないからか？」

「それも少しは有るでしょうが、主な理由では有りませんね。」

「どういう事だ？」

「あなた方に戦い方を教えているアムロさんなんですが、初陣は幾つの時だと思います？」

「そう言う事を聞くとと言う事は、ハルト達と同じか？」

「そうですね。1年か2年の違いです。戦争に巻き込まれ、偶々近くにあった最新型試作MSに乗り込み、高々数ヶ月で連邦軍第2位の撃墜スコアを叩き出しました。その当初から関わってきたのが僕の父です。」

「では、若者を戦争に投入する事には馴れている筈だが？」

「いいえ。確かにアムロさんの他にも、数々の戦争で若いパイロットを戦線に投入していますが、その全てに後悔していると言っていました。」

「そう言われてもな。実際に我々は戦わなければ殺されてしまう。特にヴァルヴレイヴのパイロット達は人体実験に使われるのがオチだ。」

「どういう事です？！」

「まだ貴生川は全てを伝えて居ないようだ。ヴァルヴレイヴのパイロット達は、ヴァルヴレイヴに乗る時に決断を迫られる。即ち、人間をやめるかとな。」

分かって居ないようだ。では教えよう。

「ヴァルヴレイヴのパイロット達は、もう人間では無い。マギウスと呼ばれる、人間とは違う生物に成っている。銃で撃たれても死なず、吸血衝動に駆られることもあるという。」

「そ、そんな！それは父達には!?!」

「まだ言っていない。それを理由に、コチラの敵になるとも限らん。」

「吸血されたら、その人は死ぬんですか？」

「いや、一時的に体に乗っ取る事が出来る程度だが。」

「そうですか。害は無いんですか？」

「一時的に意識を乗っ取られること以外は、実害は無いな。後遺症も無い。まあ、俺の場合のだが。」

「え？ 貴方が？」

「ああ。不意を付かれてな。だが、その後勝手に体を使われたような形跡は無い。これは断言できる。」

「そ、そうですか。」

「でだ。俺にジェガンの操縦方法を教えてくれないか？」

「僕は、貴方がどれだけ信用出来るのかは分からない。だから教えることは出来ない。」

やはり、そう答えるか。やはり見て覚えるしかないか。

「では一つ教えてくれ。何故君達は機動兵器で、銃弾やビームを避けられる？」

「殺気が見えるからかな。貴方も兵士だったんなら分かるでしょ？ 相手が撃つ気なのかどうか。そこを読んでいるだけですよ。」

ん？ コイツは何を言っているんだ？ そんなもの分かる訳無いだろう？ え？？

「いや、ほら、何というか、引き金を引く瞬間とか、感じる、あれ・・・やつぱり、説明は無理か。そう言う気配を察しているんですよ。」

さつぱり分からん。

「普通は相手より先に見付けて攻撃、つまり、サーチアンドデストロイか、敵の虚を付く動きで的を絞らせないで、一方的に打撃を与えるって方法しかないと思うんだが？」

「それじゃ、自分が相手にそれをやられたら死んでしまうじゃないですか。せめて相手の動きを読めるまで生き残らなければ、格上には勝てませんよ？」

「お前達は全員それが出来るのか？」

「全員では無いですけど、名のあるエースはほぼ分かるんじゃないかな？できない人は戦場で死ぬだけです。アムロさんは、そんな戦場を生き抜いて来たんです。時には機体性能で劣ることもあったでしょうが、そこは腕でカバー出来てたんですよ。機体性能の違いが、絶対な勝敗には結びつきません。最後はパイロットの腕です。」

そりゃあ、殺気が見えてれば、機体性能に差があっても勝てるだろうが、少なくとも俺には出来ない。しかし、それでも！

ん？　そう言えばハルトは俺の体を使って戦った時、すごい反応速度と正確な射撃が出来たと言っていたな。

「なあハサウエイ、一回ハルトに噛まれてくれないか？　そこでハサウエイに乗り移っ

たハルトにシミュレーションをして貰いたい。その殺気とやらを感じて貰いたいんだ。」

「なるほど、早速明日の早朝自主練でやってみましょうか。」

「ああ、たのむ。」

彼等の言う直感とは、ハルトでも感じ取れるのだろうか？それは本当に直感なのだろうか？興味は尽きない。全ては明日だな。

次の日、ハルトにハサウエイの腕を噛んでもらい、乗り移って貰った。

「では、ハルト一人対他の3人でシミュレーションして貰う。シミュレーションスタート！」

さあ見せてくれ、ハルト。その肉体の能力を！

ハルトサイド

ハサウエイ君の体でシミュレーターに入ったが、本当に殺気なんて分かるのかな？流木野さんと山田君がツートップの陣形か。犬塚先輩は、後方から援護射撃と。山田君と流木野さんが左右に別れたと同時に僕は山田君を追う。今まで僕がいた位置にビーム

が通り過ぎて行った。タイミングを合わせて犬塚先輩のブラインド攻撃か。何故か分かってしまった。

山田君が6本の腕からビームを出しながら牽制するけど、コチラに当たりそうな奴だけを最小限の動きで避ける。接近戦に切り替えたようだけど、その動きは読める。腕をまとめて切り裂き、返す刀でコックピットに突き刺す。

次は流木野さんに向けて、ボルク・アームで牽制。動きながらの牽制でも、大半が命中中。

流木野さんが怯んだ隙きに、犬塚先輩に全速力で接近。慌てる犬塚先輩の射線を見切り、隙きを見つけボルク・アームで一撃。僕を見失ったところで、背後に回り斬り付ける。何だこの体のスペックは!?!分かる、僕にも相手の動きがハッキリと!

「シミュレーション終了だ。それ以上しても意味が無い。」

「正直予想以上ね。エルエルフの体で戦った時と比べても圧倒的なんじゃない?」

「うん。でも、この戦い方は、僕には無理だよ。僕の体じゃあ、殺気何か感じられない。でも、見習うべき技術は沢山あった。それを皆で共有しよう。」

正直、このハサウエイ君でさえ、アムロさんの足元にもおよばないと言う。高みはまだまだ見えない。でも皆で生き残るために頑張らなきゃな。

ハサウェイや、アムロの指導により着々と実力を上げていくヴァルヴレイヴのパイロット達。

月面まであと少しという所で、ドルシア軍艦隊が集結しつつあった。

第5話 逆鱗に触れるドルシア

モジュール77 作戦指令室

エルエルフ

月まであと少しと言う場所で、ドルシア軍の艦隊に針路を包囲された。今回の迎撃作戦は俺の作戦で行くことになった。ロンド・ベルの連中は作戦のフォローに回る事になった。まあ、お手並み拝見ってやつだろう。

「時縞ハルト、作戦は解ってるな？」

「うん。敵を引き付けて、ハラキリブレードでトドメをつて、上手くいくのかな？」

「俺の指示通りに動けば問題ない。今回はあの人達もフォローに回ってくれと約束して貰った。彼等にお前達の力を見せつける。」

「まあ、やれるだけやって見るよ。」

チツ、何時もどおり覇気の無い奴だ。平和ボケ国民の代表の様な奴だ。自分の油断からとは言え、コイツに賭けざるを得なく成った事がなんとも腹立たしい。しかし、アイツを助けるためにはなんとしても！

作戦は俺の想定どおり進んでいる。ここは連坊小路に任せてもいいだろう。

ドルシア軍対ジオール艦隊旗艦のブリッジで、デリウス・バーテンベルク少将は小賢しくも抵抗を続けるジオールに対し、通信を開くよう部下に指示を出した。

「新生ジオール総理大臣、指南シヨーク君は君かな？今すぐ武装解除したまえ。そうすれば、君達の家族の命は保証しよう。」

「脅迫ですか？前に公表した筈です。私達の家族に手を出すと、ヴァルヴレイヴの技術はARUSに渡すと。」

「ホウ、強気だな。しかし、これを見ても同じことが言えるかな？」

ドルシア軍の下士官に、乱暴に引き摺られた男性がモニターに映る。

「お、お父さん！」

「彼はジオール前総理大臣、指南リョージ氏のだがね、中立を謳いながらも、軍備を増強し戦乱を起こそうとした罪により、死刑が確定している。今ここで君の返答次第では銃殺にも出来るんだがね？」

「卑怯じゃないですか！それが大人のやる事なの!？」

「卑怯！大いに結構！勝利や目的の為なら自らの手を汚す覚悟がある。これが大人だよ。これは秘匿回線だ、録画はもちろん、流出の心配も無い。さあ返答は如何に？」

デリウス自らが拳銃を父に向ける中、シヨークは色々な思いが頭の中を駆け巡る。

「シヨーク、信じた道を進みなさい。」

「捕虜が勝手に喋るな！」

拳銃で父親を殴るデリウス。部下と思われる男達からも理不尽な暴力を受ける父。このままでは本当に殺されてしまう。いや、作戦通りに進むなら、もう間もなくこの艦諸共……。そう思っていた所、戦況に変化が生じた。

「ん？戦闘が止まっている？何をしている！さっさと奴等を仕留めないか！」
すると副官は何の感情も無く、彼に報告する。

「少将、本国から通信です。」

「何だと？作戦中に態々通信など！誰だ!!」

それは彼が一番想像出来ない人物の名前であった。

「総統アマデウス・K・ドルシア閣下です。」

「な、何?! 繋げ!!」

「やあ、デリウス。君には失望したよ。」

「な、何の事でしょう閣下。今は作戦中なのですが。」

「その作戦とやらなのだがな、全世界に配信されているよ。私も力が全てとは言ったがな、手段を選ぶなどは言っていない。」

「そ、そんな！バカな!？」

その時メインモニターに先程までのやり取りが映っていた。コメント欄には様々な罵詈雑言が並ぶ。

流石ドルシア、手段を選ばねえ。まさにカスだな。

いやいや、下衆だろ？軍事国家（笑）。あれで力だの正義だの笑えるな。人質取るなら強盗だつてできるぜ。

いやいや、あれ元から普通に強盗だから。

ならず者国家確定!!

人類の恥・・・

あれを人類と呼んで良いものか・・・

等等、リアルタイムにコメントがアップされている。背中に脂汗が流れる。

「人質を解放しろ。一時的に戦闘は停止させている。シャトルに乗せて放り出せ。そ

の後に戦闘を再開して奴等を叩き潰すのだ。貴様の処分はその後に考える。良いか、必ず結果を残せ。そのような小細工無しでも勝てたというな！」

「ははっ！」

すぐさまモニターに敬礼をするが、一方的にモニターが切れる。ドルシア軍事盟約連邦と言う国家の品位と権威を著しく貶めてしまったのだ。彼の心中は穏やかなものでは無かった。

「何をしている！ さっさとコイツをシャトルに放り込んで、放り出せ！ あゝ、指南君。君のお父上を今からシャトルに乗せてそちらに解放しよう。その間、コチラの戦闘は停止する。シャトルがそちらのモジュールに到着次第戦闘は再開するが、もうお遊びは終わりだ。抵抗するようなら、全員死んでもらう。今からでも遅くない、降伏しなさい。」

「嫌です。貴方方のような国家は信用に値しません。降伏しても、何らかの理由を付けて殺すつもりでしょう？ 私達は戦う！」

「威勢の良いことだ。後悔する事が無いようにな。」

通信を一方的に切り、一部始終を眺めていた副官を殴り飛ばす。

「何故この回線が乗っ取られたことが分からなかった！ 監視体制はどう成っている！！」

「申し訳ありません、現在原因を調査中です。」

「貴様、この作戦が終わったら処分を覚悟しておけ！この無能が！」

今まで何度も同じような手は使ってきた。相手の弱点を付くのは、卑怯でも何でも無いと思っているが、体裁は良くない事も解っていた。

今まで安全だと思っていた回線が、今回流出した事に疑問を抱くも、それは喫緊の問題では無かった。今は、あのモジュールを如何にして血祭りに上げるか。それしか考えられなかったのである。

なぜ安全な回線が乗っ取りを受け、流出したのか。それは姿を表していないジオールの5機目のヴァルヴレイヴに原因があった。

指南シヨーコの友人、連坊小路アキラが数日前に偶然見つけたのである。誰も居ない深夜に動き出すアキラ。彼女は所謂引きこもりであった。過去に家族、兄弟、友人に裏切られ、他人と話すことは疎か、会うことにすら恐怖を感じていた。

そんな彼女にとって自由に動ける時間、それは深夜だった。以前から気になっていた地下空間でそれは突然現れた。赤紫色の人形の機体、ヴァルヴレイヴVI火遊。

彼女を誘うように、コックピットハッチが開いている。導かれるようにコックピットに入り込んだ彼女に、モニターが語りかける。

ニンゲンヤメマスク？

この文字を読んだ時、なんの躊躇いもなくハイを押した彼女は、文字通り人間を辞めることになる。それを自覚しているかどうかは別の話ではあるが。

そんな彼女にとってシヨークは唯一普通に話し合える存在だったのだ。凄腕ハツカーでもある彼女は、偶然シヨークとスキンヘッドの男との会話を、各教室にある監視カメラから聞いてしまった。

シヨークちゃんは大切なお友達だ。そんな彼女が苦しんでいる。なんとか出来ないか？ そう思った時、あのマシンならばと閃いてしまった。そこからは早かった。心の底からヴァルグレイヴを望んだ時、校舎を突き破りヴァルグレイヴが現れたのだ。

すぐさまコックピットに飛び乗り、先程の通信ログを解析。全世界にばら撒いたのだ。会話している男の個人情報もセットで。

ネットは直ぐにお祭り騒ぎとなる。それに気付いた報道各社、政府関係者、様々な人達がこの映像を目撃し、または保存し、更にばら撒いた。

それはドルシア国内でも同様である。ドルシア軍事盟約連邦は、その名の通り一枚岩では無い。しかも侵略国家である為、国内にも侵略された側、所謂不穏分子は存在するし、従っていてもその政治体制をよく思っ居ない者も多数存在するのだ。

自国の軍の所業に憤る者、嘆く者、呆れる者が続出する。中には今まで表に出なかつただけであり、あの少将だけでは無く、他にも同じような事をした者は多数居ると情報を発信する者まで現れた。

この時点でデリウス・バーテンベルク少将はもしこの戦いで勝利を納めても、軍事法廷で極刑が決定する事になっていたのだ。

それが銃殺刑になるか、服毒になるかがこの作戦の成否にかかつてはいたが。

そして、この通信を見て憤る者がラー・カイラムにも居た。自らの愛機を見て、再び戦う意志をその心に刻み込んだ少年、ハサウエイ・ノアである。

同じ年頃のヴァルヴレイヴパイロットに対して、陰ながら（ほぼバレてはいたが）訓練に付き合う等の協力をし、再び戦場に出るまで事態を静観していた。しかし、この映像を見てからは考えが変わった。

このような腐った国は潰さなくては成らない。平気で国民を騙し、非道な取引を持ちかけるとは。

このような国家が人類の主権国家になれば、地球連邦政府よりも酷い事に成るのは目に見えている。

「父さん、ごめん。僕は戦うよ、エガンダムで。アイツラを放つてはおけない。」

「・・・そうだな。ドルシアはまさに嘗てのティターンズのようなようだ。分かった、行って

来い。既にお前のパイロット登録は済ませてある。何故かアムロは今回前線に出て行くこうとしない。何か考えがあるようだがな。だが、モビルスーツ隊の隊長はアムロだ。絶対にアムロに従え、良いな?」

「ありがとう、父さん。分かったよ、アムロさんに話してみる。」

ハサウエイはブリッジから駆け出し、モビルスーツデッキに急いだ。ミガンダムに乗り込み、アムロに通信を開く。

「アムロさん、父の許しを得てモビルスーツを操縦する事に成りました。ハサウエイ・ノアです。」

すると、アムロは驚くこと無く、ハサウエイに応えた。

「そうか。ブライトから話は聞いている。君が俺に隠れて、彼らを鍛えていた事にも気付いていた。ハサウエイ、君は戦わなくても良い立場だった。何故また戦おうとする。」

父から聞いていた事に驚きもしたが、モニター越しに見るアムロの眼は自分を見極めようとする鋭いものだった。しかし、怯むわけには行かない。ハサウエイは、自分の感じたままの事を、言葉として紡ぎ出す。

「ドルシアが危険だからです。あの考えは人類の可能性を潰しかねません。」

短い言葉では有ったが、アムロはハサウエイの言わんとしている事を感じることが出

来た。そして納得した。目の前の少年は、既に戦士であると。この世界に飛ばされる前の、青臭い少年では無く、自らの信念に基づき己の命をかけて戦う戦士であると。

ブライトから話を聞いても、俄には信じられなかったが、漸く合点がいった。

「そうだな。それに奴等から、いや、この宙域全体にドス黒い悪意を感じる。ハサウエイ、俺はこの悪意の正体がわかるまでここを動けない。彼等のフォローを任せても良いか？」

「勿論です。その為に出てきましたから。」

「分かった、では行つて来い。無茶はするなよ?」

「了解です。ハサウエイ・ノア、三ガンダム行きます。」

ラー・カイラムから勢い良く飛び出した白い機体は、再び始まった戦闘の中心へと急ぐ。連邦政府に対して向けられた牙は、今まさにドルシア軍に向けて突き立てられようとしていた。

戦端が開かれても姿を現すことが無かった異世界の機体は、鬱憤を晴らすかの如く縦横無尽に戦場を駆け抜けた。作戦を教えて貰っていた為、艦隊への攻撃は手控えていたが、艦載機への攻撃は苛烈なものだった。

敵の汎ゆる攻撃を避け、又は撃ち落とし、ビームライフルやビームサーベルだけで瞬く間に敵の数を減らしていった。

それはヴァルヴレイヴーのハラキリブレードを余裕を持って出現させる事に成る。先程の通信の一部始終を見ていたハルトは最早、ドルシア艦隊に対してその剣を振るう事に躊躇いは無かった。

生理的嫌悪感、復讐心、色々な感情を込めて振るった一太刀は、モジュール77前方のドルシア艦隊を殲滅する事に成功する。

しかし、彼等を目眩ましに使い、モジュール77の背後から襲いかかろうとする艦隊が有った。カイン・ドレッツセル大佐率いる特務艦隊である。

その小規模な艦隊を、3体のイデアールが先導する。アードライ、イクスアイン、ハーノインの3人が操縦する特別仕様機だった。彼等は戦友のクーフィアが瞬く間にコックピットを撃ち抜かれた事を知っている。その為、前回の戦いで記録したリガンダムの赤外線パターンを記録した誘導ミサイルを詰め込み、何時でも撃てるようにしていたのだ。

しかし、その準備は水疱と帰す。いち早く彼等の存在に気付いたラー・カイラムによつて、ミノフスキー粒子が戦闘濃度まで急速に散布されたのである。

「クソツ！通信が乱れる！イクスアイン、どうにか成らないのか!？」

「原因不明の現象だ。私に分かる訳無いだろう。」

「レーダーも全く役に立たねえな。整備士連中手を抜きやがったのか？」
「3機同時に同じ症状が出るのだ。それは無いだろう。恐らくはあの正体不明の連中だろう。」

「お、おい！来たぜ！白い奴だ！取り敢えずミサイルをばら撒くぞ！後は勝手に赤外線だか、特有周波数だかで追いかける筈だ！」

「了解した。全機一斉発射！死ぬ、悪魔め！」

レガンダムに向けて大量のミサイルが放たれたが、そのミサイルはミサイルポッドから射出された後、一向に方向を変えることは無かった。

「ミサイルが直進しかしない!?!どうなってる!?!」

「ヤバい！逃げろイクスアイン！奴に引き金を弾くな！」

「黙ってるハーノイン、ミサイルが無くとも・」

次の瞬間、イクスアイン機のコックピットを、ビームの光が突き刺さった。痛みを感じる間もなく蒸発したのだろう。数瞬遅れてイデアールが爆発四散した。

「イクスアイン！よくも！バツフェ共はどうなっている!?!火線が明らかに少ないぞ！」

有人機と無人機で編成されたバツフェ部隊は、無人機の応答がなくなり、ただの的に成り下がっていた。大した連携を取ることもなく、宇宙世紀の当時連邦軍最強部隊で

あつたロンド・ベルのモビルスーツ隊に対して、余りにも無謀な戦闘を強いられることになる。

無人機の影に隠れる有人機を目敏く見付け、片っ端から撃ち落とすとしていく緑色の人型機動兵器達。数は少ないが、そのどれもが洗練された動きをしていた。

友軍を助けるべく動こうとするアードライにハーノインは待ったをかける。

「待てアードライ！俺達は時間を稼ぐんだ！例の兵器が奴等のモジュールに刺されれば俺達の勝ちだ！」

「クソツッ！」

興奮しながらも、時間を稼ぐため、白い機体から距離を置こうとするアードライ機の真ん中をビームが突き抜けていく。

「アードライ!!」

機体が爆発四散する中、コックピットモジュールが分離したのを確認する。

「やれやれ、俺一人でコイツの相手って、どう考えても無理でしょ！」

ランダム軌道で回避運動をしながら多連装レーザーで牽制する。しかし、抵抗も5秒程しか保つことは出来ず、胴体の真ん中を撃ち抜かれる。

「やっぱりねーっ！チキショウ！」

絶叫しながらコックピットモジュールを離脱させた。まさに危機一髪。一目散に母

艦に帰投する。

（あんな化け物相手にできるか！大佐は何を考えてるんだ!）

ハーノインは、脱出ポッドの中で内心悪態を付いていた。クーフィアを殺った手際と言い、前回の戦闘を見ていれば相手に成らない事は分かりきっていた筈だ。素人同然の今までの奴等とは、まるで動きが違う。

それでも危険を冒してまで、モジュール77に潜入し攻撃を加える意味が分からなかった。

敏感なハーノインは、カイン大佐の目的に疑問を持っていた。しかし、それを暴くのは命懸けであるとも感じていたのだ。

しかし、今日また一人の戦友が死んだ。次々に仲間が死んでいく中、このままでいいのかという疑問も確かに有ったのだ。

モヤモヤとした気持ちのまま、旗艦への進路を取るハーノインだった。

その頃、大量のバツフェとイデアールを目眩ましに、カイン大佐の乗るイデアールがモジュール77に近づこうとしていた。

「もう少しだ。君達の奮戦は忘れんぞ。」

言葉とは裏腹に、その顔には笑顔が張り付いている。既にこの体に乗っ取り、人間で

はなくなった彼にとって部下が何人死のうが、あまり関係は無かった。部下に愛着はあるが、それは、お気に入りのおもちやが使えなくなる程度のものである。

「もう少しで、我らの願望が叶う。」

しかし、その願望が叶う事は無かった。彼が乗るイデアールに仕込まれた兵器。ドルルの着いたミサイルに大量の毒ガスが仕込まれているそれを、宇宙世紀最強のパイロットが見逃す筈が無かったのである。

突如の振動で、自らの機体が攻撃を受けた事を悟るカイン。その数瞬後には、機体に搭載されていた兵器が爆発した。

「チツ！何処からの攻撃だ！この私を見付けるとは、只者ではない！」

「見付けた！この悪意の根源！貴様、何をしようとしていた！」

イデアールの後方のやや上方から、白い人型の機体が迫ってくる。

「チツ、アードライ達め！足留めも出来んとは！」

悪態を付きながらも、英雄と呼ばれた彼だ。このパイロットが尋常ではない事をカインも肌で感じていた。

「沈め！」

すぐに向きを変え上方に向けて、誘導ミサイルを一齐に撃ち込む。しかし、ミサイルは直進するだけで、白い機体を追尾することは無かった。直撃するミサイルのみを撃ち

抜き、更に接近する白い人型。たとえシールドを持つていようが、100m級の機体など、彼にとつては鈍重的でしか無かった。

「そっつー！」

正確にコックピットを撃ち抜かれ、機体は爆発四散する。

しかし、カインは生きていた。宇宙空間でさえ素肌で生存出来る彼は、一時的にRUNEの光を纏いビームの嵐と機体の爆発を耐え抜いたのだ。

「死ぬかと思つたぞ、人間！しかし、これで目眩ましには成つた筈だ！」

ここまで来ても、目的の物を奪おうとする執念は見事なものだが、その強い念はアムロに容易に察知される事になる。

「そっか!？」

反射的に放つたビームライフルは、誤ることなくカインを輝く粒子の波に叩き込んだ。

危機を脱した事に油断していたカインは、RUNEの光を発する間も無く、蒸発してしまつた。

アムロにしてみれば、悪意を感じた方向にビームを撃つただけなのだが、断末魔が聞こえたような気がしただけで、何の手応えもない事に疑問を抱くことになる。

（今のは何だつたんだ？確かに何かを撃ち抜いたとは思うのだが。ん？悪意が消えて

いく??この戦闘も、もう終わりだな。敵艦隊も引いて行く。なんとか守り抜けたな。俺も戻るか。)

引いて行くドルシア軍を一別し、機体をラー・カイラムに向ける。悪意が何を狙っていたのかは最後まで分からなかったが、この戦いの後は暫く戦闘は無いだろうと感じるアムロだった。

陸の十字架編

第6話 新生ジオール、武装化への道

ドルシア軍を退けた新生ジオールは、無事月面にモジュール77を着陸させることに成功した。これで一先ずは安泰だろう。しかし、狂犬のような国であるドルシアの事だ。何らかの理由を付けてコチラに攻撃して来る可能性は有る。

ブライトは、警戒を緩めることは無かった。

月に到着して次の日、ジオール元首相、指南リユージ氏から会談を申し込まれた。ブライトとしてもこのモジュールの異常さについて聞きたいことは山程有ったため、その申し出を受ける事になる。会談は次の日の午前中になった。彼は直ぐに長年の戦友を艦長室に呼び出した。

「アムロ、呼び出してすまん。明日元ジオール首相のサシナミリョージ氏と会談することになった。その会談の場にお前も参加してくれないか？」

「何故だブライト？一パイロットの俺に、元とは言え政治家の相手が務まると思わないんだが？」

訝しむアムロに対し、ブライトは怪訝な視線を向ける。コイツは何時もそうだ。いい

歳してゐるにも関わらず、面倒な事からは基本逃げ倒す。アテナウアー・パラヤの相手然り、上級将校の相手然りである。自分がロンド・ベルに派遣されるまでは、それなりにやっていたクセ、自分がロンド・ベルに来てからはもう、全て丸投げである。

嘆息しながらブライトはアムロに説く。

「お前は基本、人に理解されようとは思っていない。理解してもらおう事を何処か諦めている。それよりも、自分が最大のパフォーマンスを発揮する事に集中する、言わばアスリート気質な所が有る。

戦場ではそれでいいかも知れない。しかし、それではいかんのだアムロ。大人つてのは、面と向かつて話し合い、ゆつくりと相互理解していくもんだ。今からでも部隊の長として、上の者や関係者との付き合いや、腹の探り合いを覚えていけ。」

痛い所を付かれたとアムロは思った。事実、ブライトが来る前は、雑多なことに時間を取られ、自分のパフォーマンスを発揮出来ていなかった覚えがある。

「それに聞きたいことが有るんじゃないのか？ヴァルヴレイヴのパイロットの事然り。あの機体は謎が多すぎる。動力源を含めてな。」

「確かに、サシナミ氏には聞きたい事が山程ある。分かった、今回はブライトに付き合い合うぞ。」

「ああ、助かる。」

こうして Rond・ベル側からは ブライトと アムロの2名が、明日の会談に臨む事になる。

翌日、ラー・カイラムの会議室で 指南リョージとの会談が行われた。

「今回は此方の要請に応じて頂き、ありがとうございます。また、我が国の子供達を救って頂き、真にありがとうございます。」

改めて、自己紹介を。私は元ジオール首相 指南リョージと申します。西洋風によえば、リョージ・サシナミですね。リョージがファーストネームでサシナミがファミリーネームです。」

「こちらこそ態々お越し頂き、ありがとうございます。私は本艦の艦長で地球連邦軍 独立新興部隊 Rond・ベル艦隊の司令を務めています ブライト・ノアです。階級は大佐を拝命しております。」

「同じく、Rond・ベルでモビルスーツ隊の隊長を務めています アムロ・レイです。階級は大尉を拝命しています。」

「では此方も改めて。高校教師兼元V.V.V計画の一員でも有った、タクミ・キブカワだ。まあ、俺が知っている情報は粗方貴方達に開示した積もりだ。」

「ええ、大凡は把握しました。しかし分からないことが多すぎます。あの兵器は一体何のですか？ 動力らしい動力も有りません。一体何を動力源にしているのかさっぱり

りです。そして、子供達から聞きましたが、人間をやめるとは、どういう事なのですか？この学園は適合者を集めた施設でもあると聞いています。まさか、非人道的な兵器では無いでしょうね?？」

アムロは、全てを知る立場にあつたであろう指南リョージに、直接疑問を投げかけた。あれだけの高火力を持つ優秀な兵器では有るのだが、アムロはパイロットの子供達に不安のような物を感じてもいた。

「すいませんが、私も詳しいことは分かっていないのです。ドルシアに対抗出来る兵器の開発であるとしたか。しかし、私のパスコードを使えば、機密とされていた資料も閲覧できます。今からでも研究施設の端末に行きましょう。貴生川君、案内出来るかね?？」

「ええ、勿論です。では早速移動しますか。」

「此方は構いません。アムロ、一応アストナージを呼んでくれ。」

「分かった。それと念の為チェーンも呼ぼう。彼女も優秀な技術者だ。では、左舷側の機材搬入口で落ち合おう。それでいいですか、サシナミさん。」

「ええ。結構です。」

「では、艦の左舷側出口までは私がご案内します。」

「よろしくお願ひします。」

指南リョージは、思ったよりも簡単に情報の開示に応じた。人の良さそうな男だが、一国の首相にまで上り詰めた男だ。一体何を考えて居るのか。ブライトには、彼の行動に裏があるのでは無いかと感じていた。

しかし、アムロは彼に対し、何ら警戒していない。少なくとも悪意を向けている訳では無いのだろうと察する。

10分後、アストナージとチエーンを伴い、アムロが合流した。チエーンは、今回が初めてのヴァルヴレイヴ関係施設だ。興味深々の体でアムロについて来る。

研究所中央の情報端末で、ロックの掛かったファイルを早速解除する。

そして其処には、驚くべき情報が記録されていた。

先ずヴァルヴレイヴのパイロットは、彼等だけでは無かった。

彼等がヴァルヴレイヴに乗る前に、実験として一人の少女がヴァルヴレイヴを操縦している。彼女の名前は野火マリエ。現在、咲森学園の2年生だ。

彼女は、ヴァルヴレイヴのパイロットをしていたが、徐々に記憶を無くしこれ以上は危険だと判断され、ヴァルヴレイヴに乗るこから解放されていた。現在は、ヴァルヴレイヴの事について、覚えてもいないと言う。

何故記憶が消去されたのか。それは、生体エネルギーであるルーンを消失したからである。ルーンの消失により、魂を形作る記憶も消失する事になり、最後には死に至る可

能性も出てきたのだ。

では何故ルーンが消費されたのか。

それがヴァルヴレイヴのエネルギー源であったからである。

他にも判明した事は有った。人間をやめるとは、そのままの意味で、パイロットになれば本当に人間では無くなるのだ。マジウスと言う、人とは違う不死の生命体に成るのだ。

これを見たアムロは怒気を孕ませ呟く。

「悪魔め。人の命を何だと思っているんだ。」

そして、リョージに問いかける。

「サシナミさん、本当に分かってなかったのか？このような訳の分からないエネルギー源を使うという事を。そして、その末に過去を無くした少女を作ってしまった事に。」

「済まないが、本当に知らなかったのだ。逐一開発状況は入ってきていたが、正直国政に手一杯だね。勿論マリエ君が起動実験の副作用で記憶障害になっていた事は把握していた。しかし、私は彼女にこれ以上の実験参加を止めさせ、普通の生活が出来るよう厳命しただけで、このような事に成っていたとは知らなかったのだよ。」

アムロは指南の言葉に嘘は感じなかった。つまり、上層部にわざと一部の情報を開示

せず、隠していた者が居るはずだ。その時、キブカワがボソリと呟く。

「時縞博士か。」

「トキシマ?」

アムロは聞いた事がある名前に、反応する。

「ええ。VVV計画の最高責任者と同時に、ヴァルヴレイヴの開発者です。奇遇ですが、時縞ハルト君の父親でも有ります。」

「つまり彼は、父親の開発した物で、人間をやめさせられたのか。なんとも因果な。」

「いいえ、彼なら喜んで居るでしょうね。自分の開発した物の有用性を、息子が示したのですから。彼はそんな人物です。」

「マッドサイエンティストか。そんな人が人の親になるとは。だがこれで分かったな。ブライト、ヴァルヴレイヴの使用は凍結しよう。この兵器は使うべきじゃない。この施設を利用して、モビルスーツを増産しよう。ここまで来れば致し方ない。学生にも戦って貰う。」

「待てアムロ。何と戦うのだ? 彼等は非戦闘区域の月に辿り着いたのだ。無理に戦う必要など無いと思うのだが?」

「甘いなブライト。ドルシアと言う国は今も虎視眈々と此方の事を、いや、恐らくは

ヴァルヴレイヴを狙っている。奴等にこの兵器を奪われたら、それこそ人間は家畜にされてしまいかねない。この地上から、あの国を消滅させる。そして、ジオールによる地球統一国家を樹立させよう。」

「ARUSでは駄目なのか？」

「ああ。あの国も信用出来ない。他国だからと、ドルシアの横暴を看過していたような国だ。利益が無ければ戦争しないと、言っているようなものだ。人類の害悪と認識してもいない。あの政府は、ほとんど俺達の世界の地球連邦政府と同じような物だ。」

「それで、ジオールいや、新生ジオールか？あの若者達の命を無駄に死なせる事にも成りかねないんだぞ?!アムロ、少し頭を冷やせ。」

「どの道、此処はドルシアに攻め込まれるんだぞ？否が応でもあの子達は戦わなければ生き残れない！奴等が世間体を気にするとも思うのか！」

「そ、それは……。」

「ブライト、俺も好き好んであの子達に銃を取らせる積もりはない。しかし戦う術を覚えなければ、彼等は確実に死ぬぞ？もう彼等は引き返せないんだ、平和な生活に。あの時の俺達と同じなんだよ。ならば、勝ち取るしかないじゃないか。此処にはモビルスーツさえ建造出来る施設もある。なあブライト、彼等を助けるには、もうこれしか道がない。力を貸してくれないか？」

ブライトはしばらく瞑目して苦悩する。自分の何処か樂觀視した希望的予測が、未来のハサウエイを戦いに駆り出し、その未来を潰してしまった。決断するのは今なのか。若い命を幾つも散らす事になったグリプス戦役を思い出し、更に苦悩する。

彼等は人類の未来を信じ、自ら銃を取った。しかし彼等は……。いや、彼等の志は連邦政府に否定された。そして、アムロの命懸けの行動さえも、彼等は無視し、自らの私腹を肥やす行動を辞めなかったのだ。その結果がハサウエイの反乱。エウーゴでは、連邦政府を変える事は出来なかった。ならば、自らの手で世界を変える必要がある。シヤアに期待した時期も有るが、彼は連邦政府に絶望し過激に走ってしまった。

他力本願では駄目なのだ。ブライトは決断する。

「俺達は地獄に落ちるかも知らん。だが、あの子達を無駄に死なせる訳にもいかん。分かった。しかし、ジオールを奪還した後は、元正規の軍人を中心に配属させる。それと、奪還したジオールの国民が戦争を望まなければ、戦争はしない。それでいいか？」

「ああ。民衆の反対を押し切つてまで戦争を継続する気は無い。ドルシアが攻撃してこない限りはな。」

アムロの一言に少し安堵したブライトであったが、その反面あの国がそう簡単に矛を納める気は無いともどこかで感じていた。

アムロにあつては、ザビ家よりも悍ましい何かがある感覚があり、ジオールを

解放しても戦争が続くと確信していた。

第7話 進撃のロンド・ベル

モジュール77が月に不時着して3日目、指南シヨークを中心とした新生ジオール政府とブライト・ノアが対談することになった。

「艦長さん達には、本当にお世話になりました。改めてお礼を言わせてください。ありがとうございます。」

素直に礼をする指南総理大臣に微笑ましい物を感じるブライトだが、彼女達は政治家では無い。政治家のつもりも無いのだろう。生徒の代表という意識だと思う。

しかしブライトは、彼女等に決断を迫るつもりでいる。

「いや、非戦闘員を守るのは軍人の仕事だ。君達はよく頑張った。今後とも協力させて貰う。」

「ありがとうございます！艦長さん達が居れば1000人力です！」

「ありがとうございます。だが、私は此処で君達にある決断をして貰いに来た。」

「決断??」

「ああ。先ずは、ここの生徒で希望者だけで良い、此れから3ヶ月軍事訓練を受けて欲しい。我々の乗る人型機動兵器、モビルスーツをここの施設を使い量産しようと思う。」

訓練が終了すれば、ジオール解放作戦を行おうと思う。もちろん希望者が少なければ、徴兵と言う選択もある。目標は1000人だ。」

「ひや、1000人？何故ですか？このモジュールは、生産プラントも有ります。食料の問題は有りませんか？」

「そんな事じゃないんだ。あのドルシアが、非武装地帯だからと言って、何時までも我々を見逃すと思うか？中立国が兵器を開発したってだけで侵略してくる国家だぞ？」

「そ、それは……。」

「それに、我々も戦闘になれば死者も出てくる。パイロットの補充は必須だ。このままではジリ貧だぞ。」

「厳しい現実を突きつけられ、返答に困る生徒達。新任の女性教師も、どう答えていいか迷っている。」

「平和主義という言葉はとて面白い言葉だと思う。出来るならば、それを実現したい。だがな、過去国防や軍備を怠った国家は例外無く侵略され、その国民は、生命、財産、尊厳をその代償として払わされてきた。ジオールも同じだ。中立国と言っていれば、攻められないかと思っていたのか？」

本来中立国とはな、どこの国家にも属さない代わりに、何処の国家から攻められても、自己で防衛出来る国家でなければならなかったんだ。嘗てのスイスのようにな。一部

の者はスイスを平和で理想の国と思っている者もいるらしいが、それは違う。健康な男性は全員徴兵で軍役に課せられ、軍役後も予備役兵として、有事の際は銃を持って戦わなければ成らなかつた。もちろん軍備費も高かつた。そうで無ければ中立を保てなかつたんだ。

今、君達新生ジオールは、国家存亡の危機にあると思つて良い。兵力を拡充するなら今しか無い。そしてジオールを解放し、一気に体制を整えるんだ。」

「何のためにですか？」

震えながらショウコは質問する。嫌な予感が止まらない。

「最終目標は、ドルシア軍事盟約連邦を潰すんだ。新生ジオールという国家単独でな。」

「そんな！ARUSと同盟を結んで同時にでも！」

「あの国が当てになると思うか？同盟国であるジオールを見捨て、そこにドルシアに対応可能な兵器があれば奪い取りに来る。彼等は敵だよ。間違つても味方ではない。」

「そ、そんな。」

「それにな、ヴァルヴレイヴは重大な危険が秘められている事が判明した。今後ヴァルヴレイヴの使用は禁止する。彼等にはモビルスーツへの機種変換訓練を受けてもらう。」

「なんですか、その重大な危険って？」

「ヴァルヴレイヴの動力が人の生体エネルギーである事が判明した。操縦を続けることにより、そのまま死に繋がることもな。他にも危険は有るのだが、そこは秘匿させてもらう。取り敢えず、ヴァルヴレイヴの使用は凍結した方が良い。」

「そ、そう言う理由なら。でも、戦わなきゃ駄目なんですか？」

「さつきも言ったが、生き残りたいのであれば戦う必要がある。無抵抗に全員で死にたいのならば何も言わん。我々は、ARUSにでも行かせてもらう。ヴァルヴレイヴが有るから大丈夫だとは思わないことだ。パイロットを殺すシステムに君達は、友人を載せ続けることに成るのだがそれで良いのか？」

「それは駄目です！それに黙って死にたくも有りません！分かりました、有志を募ります。少なければ私も参加します。」

「子供達だけに戦わせる訳にはいきません！私も！」

人の良さそうな女性教師も名乗り出る。

「パイロット志願者には適正テストを受けてもらう。パイロットは少なくとも80人は欲しい。ジオールの解放は短時間で電撃的に行う必要がある。80機の戦力でギリのラインだろう。」

「分かりました。一週間以内に志願者を募ります。」

「辛い戦いになるが、ジオールを解放するまでの我慢だ。君達の力を貸してくれ。」
ブライトの苦渋に満ちた顔を見て、シヨウコはこの人は信用出来ると直感的に感じた。

幸い、予想以上に兵役志願者が多く、モビルスーツ適応試験合格者は100人以上となった。その中にはエルエルフの姿も有った。彼はドルシアからの亡命兵士として受け入れられた。階級は特務中尉として新生ジオール軍に配属される事となる。

彼は基本訓練を免除され、元ヴァルヴレイヴパイロット（1名除く）達と共に、モビルスーツ操縦訓練に従事する事になった。1名とは、連坊小路アキラという女子生徒である。性格的にも合っておらず、流石のアムロも彼女に戦いは無理だと判断した。

その代わりでは無いが、亡命兵士のエルエルフは優秀であった。シミュレーターではあるが、数日でジェガンを手足のように使いこなし、ケーラ・スウ中尉と互角の戦いをするようになった。

これは、元ヴァルヴレイヴのパイロット以上の実力であり、正規のパイロット達が逆にエルエルフの操縦から技を盗む程であった。実際にエルエルフに勝てるのは、アムロ、ハサウェイのニュータイプ二人と、ケーラ位で、戦闘センスの高さを遺憾無く発揮することになる。

また、元ヴァルヴレイヴパイロットの4人も、それぞれ順調に乗りこなしていき、2週間程で正規のパイロットと遜色の無い動きをするようになった。

ヴァルヴレイヴ研究施設はモビルスーツ工場と化し、急ピッチでモビルスーツを組み上げていく。ドルシア軍の戦艦や機動兵器の残骸が月周辺に大量に漂っており、材料には事欠かなかったのだ。

新生ジオールの行動に訝しみながらも、ドルシア軍事盟約連邦は静観していた。あれだけの戦力で返り討ちにあつたのだ。敵戦力の分析と、新技術の開発に力を注ぐことになる。

ドルシアは新生ジオールと和平を結ぶ事も出来た。しかし、これだけ虚仮にされて、黙っている国家では無かつたし、所詮は平和ボケしたジオールの少年少女達だと甘くも見ていた。それがドルシア軍事盟約連邦にとって致命的なミスとなる。

モジュール77が月面に不時着して半年の今日、3隻のペガサス改級強襲揚陸艦とが地球に向けて出港した。艦は、アルビオンとグレイファントム、ブランリヴァルとそれぞれ名付けられた。その後ろからHLVと呼ばれるロケットが20機以上続いていく。

目的地は地球。第一目標は、ジオールの工業都市及び中心地の解放。第二目標は、ジオールからドルシアの排除。この第二目標までを3日以内に実行する事であつた。

訓練を始めて半年の新兵ばかりの行軍に不安が無い訳では無かつたが、これ以上はド

ルシアが時間を与えてくれるとは思えなかった。機体性能の差およびミノフスキー粒子の運用次第で、勝利は可能と判断したのである。

新生ジオールによる、旧ジオール領に対する地球降下作戦は、完全にドルシア軍事盟約連邦の虚を突く形で行われる事に成った。

第8話 暁の蜂起

イワン・アレンスキー大佐は、その日黄色い猿共の弾圧を如何に効果的に行うか頭を悩ませていた。特に旧日本地区の猿共は、顔は笑つていても内心何を考へて居るのか解らなかつた。

エコノミックアニマルと揶揄されるほど勤勉で、一見従順に従つて居るように見えるが、彼等の動きは確実に怪しかつた。元ジオール軍の将校が数名行方不明になつており、後に解ることだが実際に軍備を揃へていた。

彼等が蜂起したところで、被害は少なかつただろう。機動兵器を持たず、白兵戦力を揃へるので精一杯であつたのだ。時間はかかるが、虱潰しに叩いていけば彼等は殲滅出来る筈であつた。

しかし、アレンスキー大佐は読み違へてしまつた。月に新しい勢力が出来ており、ドルシア軍の戦艦や機動兵器、資源衛生からの物資を材料に、新戦力を整へていたと言ふことを。

新暦72年1月3日、午前3時3分。年末年始に浮かれる占領地の住民を警戒し、そ

ろそろ疲れが出てきた所で悪夢は始まった。

先ず初めに気付いたのは通信員だった。各地に配備されている航空基地が次々に沈黙、定時連絡が途絶えたのだ。そして、無線通信が尽く使用不能となり、有線通信のみが可能であった。

此処にきてこの通信員は直ぐ様上官に報告。何者かによる電波障害の可能性を示唆した。

しかし、この時その上官はその上申を保留してしまう。全通信員に有線で各地に分散配備された基地との連絡を優先させたのだ。各地の陸上戦力部隊、海軍港とは連絡が取れたが、空軍基地との連絡は途絶。この時に成つて初めてこの上官は占領地司令部に報告した。

この時既に、各航空基地は破壊されており、新生ジオールの脅威はなおも進行中であった。第一次地球降下作戦のモビルスーツ隊長は、ケーラ・スウ中尉が指揮を取っていたが、新米のパイロット達の士気の高さに驚かされた。

それもそうだろう。平和に暮らしていた所をドルシア軍に突然襲撃され、友人を何人も殺されたのだ。武器を持つ軍人であれば兎も角、非武装の高校生がである。

彼らの怒りはその後も燦り続けており、ロンド・ベルが兵員の募集をしたと同時に、予定していた定員をオーバーするほどであったのだ。

その後の訓練も、勤勉なジオール人らしく真剣に取り組み、予想よりも早く実戦投入レベルまで成長したのだ。

若者特有の義憤やら使命感も有ったのだろうが、元々温厚な彼等を此処まで追い詰めたのは、ドルシアで有った。だからこれは正に自業自得なのであろう。降伏をする間も与えず、彼等は無慈悲にその引き金を引いた。

宣戦布告をする事も無く、攻め入つて来たのだ。自らが同じ事をされても文句は言えない。突然の事に、なす術もなくビームに焼かれて消えていくパイロット達。彼等は先ず宿舎を攻撃し、基地施設を破壊していった。

宇宙世紀のこの時代で主力となったジェガンには、生半可な攻撃は通用しない。直進弾と化したミサイルに当たる生徒は居らず、無傷のまま各方面の制圧は進んでいった。

そして、この攻撃に逸速く反応したのはドルシア軍ではなく、地下に潜り込んだ元ジオール軍のレジスタンスだった。彼等はドルシア軍の基地から、使用可能な機動兵器や戦闘機を篡奪。基地施設も一部復旧させ、新生ジオール軍に合流。ミノフスキー粒子散布範囲外に出ないよう、各指揮官に注意され作戦に参加。彼等は勇猛果敢に陸と空を暴れまわる事になった。

ドルシア軍は、極東の島国で100年も戦い続けてきた戦闘民族(ウォーモンガー)を叩き起こしてしまったのだ。

彼等（ウオーモンガー）は怒っていた。理由にも成らない理由で一方的に殴られ続けた事に。太平の世であつてもその腕を磨き続けた彼等は同じ性能の兵器であれば、一般のドルシア軍で有れば難なく撃墜していった。それは陸でも空でも同様であつた。実戦経験豊富なドルシア軍と互角以上に戦えたのだ。

それは地上進攻軍に正式に編入された、ミノフスキークラフト搭載機であるメガンダムを駆るハサウエイにとつても、想像以上のものであつた。加速度的に増えていく兵力。首都東京に近付く頃には凄まじい数の兵力が集まつていた。

事此処に至つてもまだ、イワン・アレンスキー駐留軍大佐は挽回不可能な状況に陥つたと気付く事は無かつた。

音もなく忍び寄るゲリラ戦部隊が地上の各施設を占拠し、ミノフスキー粒子のせいで、リーダーも通信も儘ならない状況が続ぎ、気付いたら東京地区に築かれた占領地司令部は陸上部隊に包囲されていた。

新暦72年1月3日午前7時15分、占領地司令イワン・アレンスキー大佐は極東の占領地からの撤退を決定。東京湾に停泊している数少ない艦隊と共に、旧日本領からの撤退を宣言した。

後に言う暁の蜂起である。この戦いで、新生ジオールは、旧日本地区の奪還に成功。その兵力を一気に倍増することに成功する。

これに驚いたのはドルシア軍事盟約連邦と裏で繋がっていたA R U S大統領である。旧ジオールが突然進攻されたにも関わらず、援軍の一つも寄越さず見殺しにしたのだ。軍事同盟の名の元、ジオールに駐留するA R U S軍の軍費を負担させていたにも関わらずだ。

確かに抑止力には成つたであろうが、それが張り子の虎であることが判明することにもなった。ここで何を考えたのか、A R U S大統領は新生ジオールに対し批難を声明。理由は宣戦布告無し軍事進攻であつた。

敵国である筈のドルシア軍事盟約連邦に対してだけではなく、元は同盟国であつたジオールに対しての批難声明に、ジオール国民はA R U Sに対して落胆し、新生ジオール政府は軍事同盟の破棄を決断。新生ジオールは、独自にモビルスーツの増産を開始。新生ジオール軍は、地上と月面の両方で次々にモビルスーツを生産し、一月後には、陸海空宇宙の新生ジオール軍は、武装を完全にモビルスーツへと転換することに成功。4月には、新旧ジオール領土の奪還に成功する。

そしてこの年の6月、ドルシア軍事盟約連邦首都サンクトペテルブルクに衝撃が走つた。新生ジオールがドルシア軍事盟約連邦に対して、本格的に進攻を始めたのである。